

「危ないからダメ」を言わないことへのチャレンジ ～オカタン★秋の冒険遊び場より～

米窪 洋介¹ 渡部 努¹ 山下 晋¹ 町田 由徳¹ 小原 倫子²

Yosuke Yonekubo¹ Tsutomu Watanabe¹ Susumu Yamashita¹

Yoshinori Machida¹ Tomoko Obara²

[要旨] 本論文では、2019年11月に実施した幼稚園児を対象にした「オカタン★秋の冒険遊び場」における環境や子どもの様子を紹介する。その中で「危ないからダメ」を言わないというルールを保護者に伝え、スタッフ間で共有すると子どもたちはどのように遊ぶか、学生はどのように子どもに関わるか、保護者はどのように感じるかを調査し、屋外での子どもの遊び方を検討した。

[キーワード]

子ども、屋外遊び、水遊び、安全配慮

[Key words]

child、outdoor play、water play、safety considerations

[所 属] 1 岡崎女子短期大学 (Okazaki Women's Junior College)

2 岡崎女子大学 (Okazaki Women's University)

1. 目的

幼稚園教育要領¹⁾において、「幼稚園生活が幼児にとって安全なものとなるよう、教職員による協力体制の下、幼児の主体的な活動を大切にしつつ、園庭や園舎などの環境の配慮や指導の工夫を行うこと」とされており、保育所保育指針²⁾においても、「子どもの活動が豊かに展開されるよう、保育所の設備や環境を整え、保育所の保健的環境や安全の確保などに努めること」と示され、幼稚園や保育所においては、子どもの安全を確保することは責務である。

子どもは、危険に対する予知や見通しが不十分のため、遊びや生活の中で、子どもの安全を確保するのは保育者の役割である。しかし、野田・山田³⁾は、保育者の語りから、新人保育者は、どのような状況で事故が起きやすいかという見通しが持てない為に、遊びの制止や中断をしてしまいがちな場合があるのではないかと仮説を提示している。

また、松本・杉村⁴⁾は、港区児童遊園等のあり方検討委員会の報告等から、現在の子どもの遊び環境について、子どもの怪我等に対する管理者責任が

問われるようになり、子どもの遊び環境が過度に制約されている現実があることを述べている。

このように、幼稚園や保育所において、子ども達の安心・安全を確保しなくてはならないという心理から、「危ないからダメ」などと遊びを制止したり、遊び方を規制したりすることが多くなっている。

しかし、前述の松本・杉村らや秋田・辻谷⁵⁾は、欧米の研究から、子どもの遊びのリスクは、チャレンジして、怪我をすることがあっても、大きな事故や新たな危険を避けるための学習機会であり、それによって自らの身の安全に対する判断力、行動力としての「安全力」が身につくという考えが主流になっていると述べている。つまり、「危ないこと」を経験することこそ、子どもが自ら身を守る力を身につけることができる貴重な経験であり、過度に遊びを制止したり規制したりすることは、貴重な学びの経験を奪うことに繋がるのではないかと考える。

しかし、近年、注目され、全国で広く実施されている「冒険遊び場（＝プレイパーク、以下：冒険遊び場）」では、子どもたちが火をおこしたり、のこぎりで木を切ったり、木に登ったりと普段できない、

一般的には「危険」といわれる要素を含む遊びを経験できる場となっている。

そこで本研究では、第一に、本研究チームが計画・実践した冒険遊び場を、屋外スケールで測定し、屋外における子どもの好適空間となっているかを検証した。

また、秋田・辻谷ら⁵⁾は園庭環境に関する研究の展望を通して、保育者の危険（リスク）の捉え方について、リスクのある遊びを意義あるものと捉えるには、保育者自身の知識や経験が重要であることや、実際の関わり方については、保育者自身の保育観に左右されることを述べている。

そこで、本研究では第二に、保育者をめざす学生が屋外で子どもたちと関わる際に、「危ないからダメ」という言葉を使わずに、子どもたちがチャレンジできる環境や援助を実践し、学生アンケートや参加した子どもの保護者のアンケートから、危険を伴う遊びに対する環境や援助のあり方、子どもの遊ぶ姿や育ちについて検討し、冒険遊び場の意義について検証することを目的とした。

II. 方法

(1) 「オカタン★秋の冒険遊び場」実践

令和元（2019）年11月16日（土）10：00～15：00、本学のグラウンドに本遊び場を設け、幼児とその保護者を対象に実践した。

本学の付属幼稚園に案内募集チラシを配布し集客をした。その際、参加者には事故に備えたレクリエーション保険への加入と、記録写真の撮影に協力を依頼し、全員から承諾を得た。

(2) アンケート調査

①保護者アンケート

受付の際、保護者にアンケートに協力を依頼し、調査を行った。調査項目は、先行研究⁶⁾を参考にし、下記の通りとした（表1）。

得られた結果から、各項目の平均値、標準偏差を算出した。また、各遊びの熱中度と熱中時間の比較には、遊びを因子とする一元配置分散分析（TukeyのHSD法による多重比較）、熱中度と熱中時間について、2変数間の関係を調べるために、Pearsonの相関係数を求めた。なお、分析にはSPSS ver.18を用い、統計的有意水準を5%（ $p<0.05$ ）とした。

②学生アンケート

屋外の遊び空間の質を客観的に測定するため、筆者らが作成した「屋外の遊び空間評価スケール（以下：屋外スケール）」⁷⁾を用いて、評価を行った。

また、本遊び場で子どもが何に熱中し、遊び込んでいるのか、遊びを通してどのような力をつけているのか、本遊び場と授業や実習で見た子どもの姿との違い、「危ないからダメ」と言わないことについて、記述式のアンケートを行った（表2）。得られた結果を集約し、学生の気づきとしてまとめた。

表1：保護者アンケートの調査項目

- 属性
 - ・子どもの年齢・性別
- 滞在時間
 - ・来場時刻と退場時刻
- 日頃の遊びの様子
 - ・屋内と屋外の遊びの比率
 - ・遊ぶ場所
- 当日の子どもの様子
 - ・熱中度（ワクワク★ドキドキ度、5段階で選択）
 - ・熱中時間（遊んだ時間、5段階で選択）
 - ・遊ばなかった理由
- 「危ないからダメ」と言わないことについて
 - ・どのように感じるか
 - ・このことによって、子どもの遊ぶ姿は普段と違っていたか

表2：学生アンケートの調査項目

- 屋外スケール
 - ・本遊び場の環境について「5.とても当てはまる」「4.当てはまる」「3.どちらともいえない」「2.あまり当てはまらない」「1.全く当てはまらない」で回答
- 当日の子どもの様子
 - ・子どもはどんな遊びに熱中していたか、その理由
 - ・本遊び場と授業や実習で見た子どもの姿との違い
- 「危ないからダメ」と言わないことについて
 - ・どのように感じるか

なお、この研究は本学の研究倫理委員会の研究倫理審査を受け、承認を得ている（通知番号19）。

III. 結果及び考察

(1) 「オカタン★秋の冒険遊び場」実践

筆者らが先行研究で調査した各地の冒険遊び場プレイパークの遊具を参考にしたり、冒険遊び場の遊具に関する文献やについて調査をした結果をもとにしたりして⁴⁾⁵⁾⁶⁾、本遊び場の遊具を作成し、環境の構成を行った。（図1）

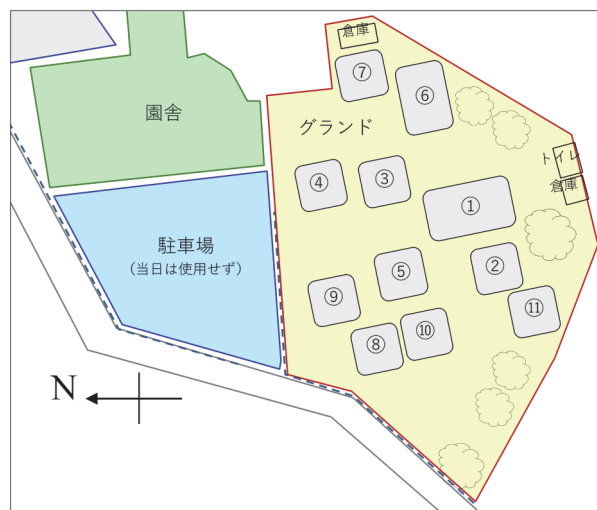


図1：オカタン★秋の冒険遊び場の鳥瞰図
* 図中の番号は表3の番号と対応している

本学のグラウンドは、通常、道路から車などが侵入できないようにフェンスが設けてあり、安全な環境である。駐車場では遊びを計画していなかったが、安全配慮のため、車両の乗り入れを禁止した。

開催当日は晴天で、最高気温 17 度、昼頃は風もなく、絶好の屋外遊び日和であった。開催時間の午前 10 時から、随時、親子が来場し、全体で 44 組（子ども 79 人、保護者 56 人）の参加があった。

参加した子どもには、受付で学生が「好きなことをしていいよ」と声を掛け、また、保護者に対しては「今日は『危ないからダメ』』ということはいわないでください」とお願いをした。その後、子どもたちは兄弟、学生と楽しそうに遊びを始めた。本遊び場の内容と、子どもが遊ぶ様子を表3および図2にまとめた。

表3：「オカタン★秋の冒険遊び場」コーナー名と概要

No.	コーナー名	概 要
①	見晴らし台	2mの高さに、4m×4mの広さの見晴らし台を製作した。見晴らし台には安易に登る階段がなく、ホールドの加工がされた壁または、編み込まれたロープ、滑り台を用いて登ったり、降りたりするようにした。子どもたちは思い思いの方法で登ったり、滑り降りたりしながら、併設されたターザンロープを楽しんでいた。また、見晴らし台の下のパイプを使って、鉄棒のように遊ぶ子どもの姿も見られた。
②	基地づくり	ビールケースや段ボール、布やガムテープを用いて、子どもが自由に組み立てて、基地や部屋が作れるように材料を準備した。基地を作った後に布でハンモックを吊し、トンネルのように部屋を連結するなど遊びが広がっていった。
③	竹の遊び	長くて太い竹と、竹が転がらないように V 字にカットした木の台を準備した。竹同士を道のようにつなぎ合わせ、竹から落ちないようにバランスをとりながら渡る遊びを楽しんでいた。
④	木のドラム	電線が巻かれていた木製のドラムに、耐水用塗料で3色に色を付けた。シャボン玉のテーブルとして用いたり、上に乗ったりしてバランスをとりながらドラムを転がす姿が見られた。
⑤	ふわふわプール	3.6m×3.6mの木製の木枠を作り、底部や側壁にはマットを敷き、その上からシートで固定した。その中にプラスチックボールや、新聞を芯にして、ガムテープで覆った手作りのボールなどを入れて、ボール遊びを行った。
⑥	たき火	レンガやコンクリートブロックで、自由に組み立てられるかまどを準備した。火を起こした後、芋やマシュマロを焼いたり、マシュマロなどを竹にさしたりして焼いたり、アルミホイルでくるんだソーセージやピザを焼いたりして食べる姿が見られた。
⑦	制作	木材をのこぎりで切り、釘を金づちで打って、思い思いの作品を保護者とともに制作する姿が見られた。木工具を初めて使う子どもが多く、保護者や学生とともに試行錯誤しながら、制作に取り組んでいた。
⑧	車輪の遊具	木製の台に車輪をつけた台車を押したり、ひもで引いたり、連結させて遊ぶ姿が見られた。台車を連結させ、多くの子どもを乗せたまま、学生が遊び場をぐるぐる引いて歩く「電車ごっこ」を楽しんでいた。
⑨	こま・けん玉	こまやけん玉、ゴム跳びのゴムを準備した。それぞれの遊びに得意な子どもが中心となり、初めて遊ぶ子どもにも教えたり、みんなで競い合ったりして、楽しく遊ぶ姿が見られた。
⑩	シャボン玉	洗剤と洗濯糊(PVA)でシャボン玉液を作り、ストローを切って吹く道具を作った。シャボン玉の液の濃度や吹く道具を調整したり、吹き方を工夫したりしながら、シャボン玉を楽しんでいた。中には綿ロープを輪にして、大きなシャボン玉を作って遊ぶ子どももいた。
⑪	土遊び	スコップやバケツを使い、土を掘ったり水を流したりして泥んこ遊びを行っていた。日頃は汚れてしまうことから泥んこ遊びができない子どもも、時間制限がなく汚れても良い環境で伸び伸びと土との遊びを楽しんでいた。

* これらのほか、長縄跳びやロープ渡り（スラックライン）、木登り（縄ばしご、ブランコ）の遊具のほか、受付、テーブルとベンチ、手洗い場を設けた。

本遊び場の環境について、38人の学生が屋外の遊び環境スケールを用いて、評価をした結果、38項目中34項目において平均値が4.0以上であり、屋外の好適空間の条件に「当てはまる」と評価した。当てはまらなかった項目は、「(No.26) 算数や理科の用具が十分にあり、自由に使うことができる(3.8±1.0)」「(No.36) 特別な配慮を要する子どもが遊ぶことができる(3.9±0.9)」「(No.37) 特別な配慮を要する子どもに応じた設備や用具がある(3.7±0.9)」「(No.38) 特別な配慮を要する子どものための適切な関わりをしている(3.4±1.1)」であった。

これは先の調査^[注1]同様、算数や理科に繋がる遊びがあったが、その遊びに関わらなかったり、関わっていても気づいていないことが要因と考えられた。今後は、それぞれのコーナーに含まれる遊びの要素をしっかりと伝えていく必要があると感じた。また、(No.36～38)については、準備の段階から、特別な配慮を要する子どもが参加した場合を想定して、取り組んでいく必要があり、今後の課題となった。

(2) 保護者アンケート調査

参加した79人の子どものうち、回答を得ることができた子ども55人(男児26人、女児29人)の年齢別の人数(割合)は、2歳以下4人(7.3%)、3歳児4人(7.3%)、4歳児10人(18.2%)、5歳児18人(32.7%)、6歳以上19人(34.5%)であった。

幼稚園に行かない日の遊ぶ場所の比率の平均は、

屋内5.5に対して、屋外4.5であった。また、屋外での遊び場所は、児童公園(46)、自宅周辺(24)、自宅の庭(22)、自然環境(8)、プレイパーク(8)、スポーツ教室(6)となっていた(複数回答)。

幼稚園に行かない日の遊ぶ場所の比率の平均について、今までの3回の調査では、屋内6.0:屋外4.0(2018年冬)、屋内5.2:屋外4.8(2019年夏)と同様の結果であった。近年、屋外で遊ぶ場所の減少や公園での遊びの制限、安全面への配慮などから屋外遊びが減少している。心身ともに健やかに成長するためにも、屋外遊びの機会を増やす取り組みが求められている。

本遊び場において、どのコーナーでどれくらい「ワクワク、ドキドキ熱中していたか(以下:熱中度)」について比較をした結果を、熱中度順にして表4に示した。見晴らし台、制作、ふわふわプール、車輪の遊具、シャボン玉の順に熱中度が高く、特に見晴らし台は、基地づくり、竹の遊び、木のドラム、たき火、コマ・けん玉、シャボン玉、土の遊びとの間に有意な差が認められた。

次に、どのコーナーでどれくらい「熱中して時間が持続していたか(以下:熱中時間)」について、比較した結果を熱中時間順にし、遊ばなかったコーナーについてはその理由とともに表5に示した。制作、見晴らし台、ふわふわプール、車輪の遊具、基地づくり、シャボン玉の順に熱中時間が長かった。

この熱中度と熱中時間の間には、有意な強い正の相関($r=0.832$, $p<0.001$)が見られた。



図2：オカタン★秋の冒険遊び場で遊ぶ子どもの様子

上段(左) ふわふわプール、(中) 制作、(右) シャボン玉、下段(左) 土の遊び、(中) ロープ渡り、(右) 木登り

表4：各コーナーでの熱中度の比較

コーナー	熱中度	有意差が認められたコーナー
見晴らし台	4.2±1.1	>基地づくり、竹の遊び、木のドラム、たき火、コマ・けん玉、シャボン玉、土の遊び
制作	3.9±1.6	>基地づくり、竹の遊び、木のドラム、たき火、コマ・けん玉、土の遊び
ふわふわプール	3.7±1.4	>竹の遊び、木のドラム、たき火、コマ・けん玉、土の遊び
車輪の遊具	3.5±1.5	>コマ・けん玉、土の遊び
シャボン玉	3.0±1.5	<見晴らし台 / >土の遊び
基地づくり	2.8±1.7	>見晴らし台、制作
たき火	2.8±1.5	<見晴らし台、ふわふわプール、制作
木のドラム	2.7±1.3	<見晴らし台、ふわふわプール、制作
竹の遊び	2.6±1.4	<見晴らし台、ふわふわプール、制作
こま・けん玉	2.4±1.4	<見晴らし台、ふわふわプール、制作、車輪の遊具
土の遊び	1.9±1.4	<見晴らし台、基地づくり、ふわふわプール、制作、車輪の遊具、シャボン玉

値は平均値±標準偏差、有意水準 $p < 0.05$

表5：各コーナーでの熱中時間と遊ばなかった理由

コーナー	熱中時間	有意差が認められたコーナー	遊ばなかった理由
制作	3.6±1.6	>竹の遊び、木のドラム、たき火、コマ・けん玉、土の遊び	興味がない (9)、時間がない (1) その他 (1) 気づかなかった
見晴らし台	3.5±1.2	>竹の遊び、木のドラム、たき火、コマ・けん玉、土の遊び	時間がない (1)、怖い (6)
ふわふわプール	3.5±1.2	>竹の遊び、木のドラム、たき火、コマ・けん玉、土の遊び	興味がない (9)、時間がない (2)、混んでいた (1)
車輪の遊具	3.2±1.4	>木のドラム、土の遊び	興味がない (4)、怖い (1) その他 (2)
基地づくり	3.1±1.6	>土の遊び	興味がない (15)、時間がない (5) その他 (3) 遊び方がわからなかった
シャボン玉	3.0±1.0	(なし)	興味がない (8)、時間がない (6) その他 (2) 他に夢中
たき火	2.5±1.4	<見晴らし台、ふわふわプール、制作	興味がない (7)、時間がない (3)、混んでいた (2) その他 (4) 気づかなかった
こま・けん玉	2.5±1.4	<見晴らし台、ふわふわプール、制作	興味がない (11)、時間がない (3) その他 (2) 他に夢中、気づかなかった
竹の遊び	2.4±1.1	<見晴らし台、ふわふわプール、制作	興味がない (11)、時間がない (4) その他 (2) 難しかった
木のドラム	2.2±1.2	<見晴らし台、ふわふわプール、制作、車輪の遊具	興味がない (8)、時間がない (2)、怖い (1)、 その他 (1) 気づかなかった
土の遊び	1.9±1.4	<見晴らし台、基地づくり、ふわふわプール、制作、車輪の遊具	興味がない (12)、時間がない (7) その他 (6) 気づいていない、寒い

値は平均値±標準偏差、有意水準 $p < 0.05$ 

図3：車輪の遊具で遊ぶ子どもの様子

車輪の遊具は多くの子どもたちに人気であった

これらの結果から、子どもが熱中する遊びのキーワードは、見晴らし台、ふわふわプールのように「普段できない遊び」、制作のように「自分の発想で自由に作る遊び」、車輪の遊具（図3）のように「普段行っている遊びをダイナミックに発展させた遊び」であり、今までの調査と同様の結果が得られた。また、熱中度と熱中時間の関係についても、今までの調査と同じであり、遊び方や遊ぶ時間に制限がない冒険遊び場では、興味を持った遊びに満足が得られるまで遊び込むことが明らかになった。今後の冒険遊び場の環境づくりにおいては、これらのことを意識して取り組んでいきたい。

本遊び場で、子どもへの援助の際、「危ないからダメ」という言葉を使わずに、子どもと関わった学生の振り返りから、危険を起因とすることによる遊びを規制しないことに対する意見を集約した（表 5）。

表 5：「危ないからダメ」に対する学生の意見

<p>（ア）肯定的な意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「危ないからダメ」と言ってしまうと子どもの経験を妨げてしまう。 ・子どもが好奇心をもって、挑戦することによって、子どもが自分自身でできるところまでを知ることができたり、やりたいことを十分にできるという面でも良い。 ・実際にやってみたことによって、自分自身で「危ない」と思ったり、ケガをすることによって、自分の身をどのように守ったら良いのか考え、次にけがをしないための方法を学ぶ大切な経験である。 ・やってみることで大人ができないと思っていることでも、実際にはできることがある。 <p>（イ）援助は危険の程度によって必要という意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すり傷程度の怪我をしたり、失敗してから分かることもあるが、命に関わることであれば、ダメと強く言う必要があると思う。 ・子どもは経験を通して、危険を認識するが、命に関わる危険なことをしていたら止めるべきである。 ・本当に危険だと思うことは、子どもになぜその行為がいけないのかを具体的に説明し、子どもが理解できるようにする必要がある。 <p>（ウ）実際の援助に対する迷い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「危険が起きてから注意」では遅く、どこまでを許してよいのか、判断に迷う時もたくさんあった。 ・保育者などの大人が一切言わないと言うことは、あまりよくないと思う。 <p>（エ）援助や環境が必要という意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ダメ」と否定的な言葉ではなく、「こうしてみたら」と子ども自身が考えて行動できるような援助が必要である。 ・「危ないからダメ」と言わないためには、大人がしっかり見守る必要がある。 ・子どもが安全に自分で考えて自由に遊べるように、マットを敷くなど安全な環境を保つため、事前準備をする必要がある。

この結果、（ア）子どもたちが自分で危険なことに気づいたり予測したりすることができるようになる点から、「危ないからダメ」と言わないことは肯定的に捉えていた。一方で、（イ）危険の程度によって、必要に応じて止めるべきであるという考えを持つ

ている学生もみられたが、実際は、（ウ）援助のあり方に迷いを感じている学生もいた。他にも、（エ）「危ないからダメ」と遊びの制止や禁止をせず、子どもに経験の機会を保障するためには、適切な援助や環境構成が必要であると記述していた。

また、学生が感じた「授業や実習で見た子どもの姿と、本遊び場で見た姿の違い」について集約した（表 6）。

表 6：授業や実習と本遊び場で見た子どもの姿の違い

<p>○環境・物的要因による違い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園庭よりも広く、思いっきり体を動かせる空間であったため、子どもたちも伸び伸びと遊んでおり、子どもたちの元気な声がどこにいてもずっと聞こえていた。 ・ボールのプールなど普段経験できない遊びがたくさんあり、いろんなことに興味を持ったり、好奇心があふれている子どもが多く、目がとてもきらきらしていた。 ・遊具の数も充分であったため、取り合うこともなく、他の友達に気を遣うことなく、1人で黙々と集中して遊んでいる姿が見られた。 <p>○ルールや活動形態などの要因による違い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園や保育所などでは、遊びに制限があり、「危険だからやめようね」と言われてできないこともあるが、本遊び場では、遊びに制限がないので、思う存分、自分の好きな遊びに取り組んでいた。 ・すべり台を反対側から登って遊んだり、台車（車輪の遊具）の上にイスを置いて乗ってみるなど、「やってみよう」という気持ちですぐ行動につながっており、より楽しい遊び方をすることによって、生き生きとした表情であった。 ・一斉活動ではなく、子どもが興味を持ったことに取り組んでおり、遊び方も多様であった。 ・時間の制限もないため、満足するまで、やりたい遊びを好きなだけ取り組んでいた。 <p>○人的環境による違い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者や学生が近くで見ていることによって、安心感をもって遊んでいるようであった。 ・大人や学生と遊んだり、同年齢の友達と仲良く協力して遊んでいたりと、年上の子どもが年下の子どもに遊び方を教えていたりする姿が見られた。
--

本遊び場で学生が見た子どもの姿は「園庭よりも広く、思いっきり体を動かしていた」「普段経験できない遊びが多く、興味や好奇心を示していた」「遊具の数も充分であり、集中して遊んでいた」など物的環境による子どもの姿の違いを感じていた。

また、「すべり台を反対側から登って遊ぶなど、運動意欲が行動につながっていた」など園とのルールの違いや、時間的な制限がない点、保護者・学生など様々な年齢の人々と関わることによる人的環境の違いによって授業や実習とは違う姿を感じていた。このような環境やルールの違いによって、「嫌だ」「怖い」など消極的な発言をする子どもは見られず、「やってもいい？」ではなく「やってみたい!」と積極的な声が多かったと声が寄せられた。

これらの学生のアンケートからは、子どもが安全に遊べる必要最小限の環境が整備され、きちんと見守られた環境の中で、子どもが興味や好奇心を持って挑戦する機会を持てることや、危険なことを感じて、次はどのようにしたら良いかなど、考える力を養える機会を得ることが、子どもの成長には必要であると肯定的な意見が多く見られ、危ないからダメと言って、危険が伴う遊びの規制や、禁止するべきであるという否定的な意見はほとんど見られなかった。

一方で、なんでも良いではなく、命に関わるような場合など、必要に応じて言葉をかけ、行動を制止することが、幼児期の子どもには重要であるとの意見も見られた。

このことから、学生は単に子どもが自由に遊べる環境が良いと捉えているのではなく、子どもが危険を乗り越えながら遊び、学びを得ていくためには、大人の見守りや援助、適切な環境が必要であることを捉えており、幼児教育や保育を学んできたからこそ得られた知見であると考えられる。「危ないからダメ」と過度な規制や禁止をされない環境の中では、普段の子どもの姿と異なる姿が見られたことを記述する学生が多く見られた。「伸び伸びと遊んでいた」「思う存分遊んでいた」「いろいろなことに挑戦していた」などの記述が多く見られ、遊びを規制されないことによる子どもの姿を捉えていた（図4）。

幼稚園や保育所は、時間的な制約や子どもを見守る保育者の数等の問題から、子どもたちの遊びを制限せざるを得ない状況があることが、学生のアンケートからも窺うことができる。学生の振り返りにもあるように、幼児期の遊び環境においては、安全を確保するための適切な環境としっかりと子どもを見守る大人の援助が大切であることを考えると、本遊び場のような遊び環境が現代の子どもたちにとっては必要である。

また、学生のアンケートの中には、危険を伴う遊びに対する援助に戸惑ったという記述も見られた。秋田・辻谷ら⁵⁾は、Sandseter (2007)の研究結果から、保育者が子どもの遊びに対するリスクを理解した上で援助を実践するには、養成課程や実践での研修が必要であることを述べている。学生は子どもへの援助の仕方に迷い、考えながら実践し、その援助を振り返ることを通して、子どもの遊びに対する援助について学びを得ていると言える。本冒険遊び場は、子どもへの遊び環境を提供するだけでなく、学生に対しても深い学びの場になっていることが明らかになった。

最後に、参加した保護者から得られた「危ないからダメ」と言わないことについての意見・感想を表7にまとめた。

保護者の多くは、子どもに「危ないからダメ」と言わず、多少の危険が伴っても自由に遊ばせたいという思いを持っていることが窺える。

一方で、子どもの危険について、予測ができる保護者としては、怪我に繋がる要因が少しでも内在すると意識が過敏になり、その危険を先に子どもに伝え、遊ばせないようにしてしまう心理が働いてしまうという意見もあった。子どもを自由に遊ばせてあげたいという思いとは裏腹に注意する言葉が先に出てしまうことは、親としてもジレンマを感じてい



図4：自由な発想で様々な遊びに挑戦する子どもたち

(左) ネットクライミング、(中) 浮き球のブランコ、(右) 木のドラムでバランスをとっている様子

表7:「危ないからダメ」と言わないことについて保護者の意見・感想

どのように感じるか？	子ども遊ぶ姿は普段と違っていたか？
親の目が行き届く範囲であれば、自由に遊ばせてやりたい。ただ、危ない行動を見たら、しっかり注意してほしい。	のびのび遊んでいた。「あれダメ、これダメ」と言われて遊ぶよりは自由な発想で遊べて楽しそうだった。
すごく良いと思う。ルールに縛られず、遊びながら子どもが無茶苦茶なルールを決めていくという、大人が忘れかけていた遊び心が思い出された。	日頃どちらかと言えば「自由に遊ばせるタイプ」で、それを学生に受け入れ、遊んでもらえて本当に楽しそうだった。
経験して初めて理解することも多いと思うので、危ないと思っても見守る余裕も必要なのかなと感じた。	縄梯子で木に登っていく息子を見て、いつもと違う遊び方がとても楽しそうだった。いつも苦手な事から逃げがちな息子ですが、何度もチャレンジしたのが印象的でした。
いつも親の事情でダメと言ってしまうので、たまには子どもの為にも、気にせず自由に遊ばせてあげられるのはとても大切だと思った。	いつも以上に伸び伸びと走り回り、創作していた。
いつも子どもに「ダメ、危ない、服が汚れる」などマイナスなことをつい言ってしまう、子どもも親の顔色を伺って気を使わせてしまう事もある。伸び伸び遊ばせたい気持ちもあるが、実際は上手くいかない。	普段はできない焚き火を体験できたり、絵の具を使って制作できた事を喜んでいて。焚き火は子ども自身がマシュマロを焼いていたが、「熱いね、危ないから気をつける」など自分で注意してやっていた。
この方針に賛成であり、そのような場は少ないと感じているので、ありがたいと思う。多少の心身の擦り傷があっても自分で乗り越える力を身体的にも精神的にも身に付けて欲しい、やりたいことをとことんして欲しい。 普段あまりやらない遊びでも、自ら長時間遊び続け、子どもの力を感じさせてもらった。汚れや多少の危険は気にしないよう接してきたが、『時間』はどうだったかと反省している。	娘は午後のほぼ全ての時間を園ではあまりやらなくなった泥遊びをやっていた。環境が用意されていたので、時間を気にせず、汚れを気にせずに集中していた。
「危ないからダメ」と言わないことは、私自身にとって、親子がよい方向に向かう、良いチャレンジだった。「危ないからダメ」に限らず、家では毎日のように、「何やってるの」「早く」「何でそんなことするの」と、また外では、周りに気を使い、迷惑をかけないように、注意してしまう。 社会性を身に付けるために、必要ではあるが、我が子の思いを汲み取る余裕がない。今回は子どもの主体性が大切にされている安心感があり、そばに寄り添うことに、余裕の気持ちが持てた。	子どもは、親の私の注意が入らないので、すねることもなく、ずっと笑顔でいられた。用事があり、早めに切り上げて帰らねばならなかったが、よく話し合った末、帰るタイミングを決めて（まだ遊びたかったと思うが）、素直に帰ることができた。
危険に対して体験型で学ぶ方が、言葉による学びより身になると思う。しかし、実際は親として、いつも通り注意をやめられなかった。	ノコギリやハンマーをどんどん使っていたが、私が注意したことは守っていた。
禁止されると、「子どもたちの遊ぶ力」がなくなるのでとても良いことである。	色々なことに取り組む姿が見られたうえ、ずっと笑って遊んでいた。

る点でもあった。

本遊び場で遊ぶ子どもの姿について、「楽しそうだった」「いろいろなことに挑戦、チャレンジしていた」「笑顔であった」などの普段の姿とは異なる肯定的な意見が多く、日常の生活の中では経験しにくい

ことが本遊び場では経験できるのではないかとと思われる。本遊び場で、過度に注意や禁止をしない関わりを通して、子どもとの関わり方を見直すきっかけになっていることを記述する保護者も見られた。本遊び場は、子育て支援の場になっていることが考えられた。

IV. まとめ

本研究では、筆者らが実践した冒険遊び場が、屋外における子どもの好適空間になっているかという視点と、学生や保護者が「危ないからダメ」という言葉を使わないルールの下で、危険が伴う遊びに対する環境や援助のあり方、子どもの遊ぶ姿や育ちについて検討し、冒険遊びの場の意義について検証を行った。

学生アンケートの結果から、屋外における子どもの好適空間とは、子どもにとって「日頃、経験できないことができる空間」が大きなキーワードであった。

また、自分の発想で自由に遊ぶような場は、子どもが様々なことに挑戦しようとする力を育くむことにつながる。そのため、「危ないからダメ」と子どもの活動を制限するのではなく、子どもの「やってみたい」という思いを尊重し、支えるためにも、大人が見守ったり、安全な遊び環境を準備たりしておくことが、必要であった。そして、自らの成功体験や失敗体験を通して、子どもは危険なことを察知し、安全か危険かを判断する力や、危険を予知・回避する力を養うことができることが示された。

これらのことから、冒険遊び場など屋外での自由な活動が子どもにとって、また、子どもに関わる保護者、保育者、保育者養成校の学生にとって、有益な機会となることから、屋外遊びの必要性を広く発信して、実践に繋げていくことが重要である。

[引用文献]

- 1) 幼稚園教育要領、文部科学省 (2017)
- 2) 保育所保育指針、厚生労働省 (2017)
- 3) 野田舞、山田真紀 (2018)「園庭遊具の遊びの価値と安全性を高める方法についての実証的研究—ハザードとリスクの概念を中心に—」保育学研究 56 巻 2 号、pp.39-50
- 4) 松本信吾、杉村伸一郎 他 (2019)「遊びのリスクに対する幼稚園保護者の認識の変容要因」広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第 43 号 (2015) pp.36-42
- 5) 秋田喜代美、辻谷真知子 他 (2019)「園庭環境に関する研究の展望」東京大学大学院教育学研究科紀要 (58)、pp.495-533
- 6) 山下晋、米窪洋介、渡部努、町田由徳、小原倫子 (2019)「『オカタン★冬の冒険遊び場』実践研究～子どもの熱中度分析から屋外の子どもの好適空間のあり方を探る～」岡崎女子短期大学『子ども好適空間研究』第 1 号、pp.73-

岡崎女子短期大学「子ども好適空間研究」第 2 号 2020 年

- 7) 山下晋、米窪洋介、渡部努、町田由徳、小原倫子 (2019)「屋外の遊び空間を評価するスケールの作成～屋外における子ども好適空間形成のための指標研究～」岡崎女子短期大学『子ども好適空間研究』第 1 号、pp.11-19
- 8) 特定非営利活動法人 日本冒険遊び場づくり協会 (2004)「はじめよう！パートナーシップで冒険遊び場づくり」(2004) pp.8-9
- 9) 青木沙織、荻原礼子編集 (2003)「みんなでつくろう！夢の遊び場手づくり遊び場デザインカタログ」。まちワーク研究会発行
- 10) 米窪洋介、山下晋、渡部努、町田由徳、小原倫子 (2019)「冒険遊び場（プレイパーク）の調査報告～本学おけるに『冒険遊び場』実施に向けての調査～」岡崎女子短期大学『子ども好適空間研究』第 1 号、pp.80-87

[注 1] “先の調査”とは、2019 年 6 月に実施した「オカタン★夏の冒険遊び場」を通して行った調査のことであり、現時点では公表されていない。『子ども好適空間研究』第 2 号に掲載予定である。

本論文は、全章にわたり共同で執筆したため、執筆担当の抽出は不能である。